岩松惇は本校入学（昭和二年）後左翼運動に傾き、同四年三月、前年に引続いての「体操」と「遠近法」不合格の廉で諭旨退学を申し渡され、説諭に応じないばかりか、担当職員を殴ったりしたので除名の処分を受けた。自著『あたらしい太陽』（一九七八年、晶文社）にはその時の情景を描いた版画に添えて「しかし、官立美術学校は、軍事教練不出席の理由で、私を放りだしてしまった。いや、陳述さえ受けつけぬ生徒監〔生徒主事の誤りか〕を一撃して、私は学校を捨てた。」という言葉が記されている。八島の場合は持ち前の奔放な気質による反発という面が大きいが、そこに左翼的思想も介在していたことも否めない。

③ 科外講義

本校では従来時折り一般を対象とする科外講義を開設したが、大正十四年度においては次の二つが開設された。

一、考古学（茶道、模様論）　大正十四年四月～同十五年三月、毎週土曜日午後一時～二時。講師今泉雄作（本校講師）。聴講者男三十人、女五人。受講費無料。

二、支那絵画史（歴代名画記、図画見聞誌、画継）　大正十四年四月～同十五年三月、毎週火曜日午前十一時～十二時。講師大村西崖（本校教授）。聴講者男二十人、女三人。受講費無料。

大正十五年四月、文部省専門学務局長より正木直彦校長に対し、「學校擴張事業ニ関スル調査ノ件」の問合わせがあった。それは「學校擴張事業ハ近時著シク發達シ貴校ニ於テモ、從来、各種ノ名稱ノ下ニ一般民衆ヲ對象トスル學校擴張事業ニ関シ施設セラレタルコト、思料セラルヽカ、今回調査上必要有之、大正十四年度中ニ於テ實施セラレタル施設ニ関シ」報告せよという内容であった。これに対して校長は「本校ニ於テハ別段學校擴張ヲ目的トシテ施設シタル事業無之只聴講者ニ特別ノ資格制限ヲ設ケサル左記〔別紙に上記二科目の実施概要が記されている。〕事業ハ稍々類似セルモノト思考セラレ候」云々と回答している。

④ 森芳太郎の在外研究

教授森芳太郎（東北帝国大学講師兼任）は大正十四年十一月、文部省より工芸化学研究のため満二年間ドイツ在留を命ぜられ、同年十二月二十日に出発した。追ってアメリカ合衆国在留をも命ぜられ、昭和三年三月十四日、研究を遂げて帰国。本校に復職し、同七年まで工芸化学および化学実験授業を担当した。

森は明治二十三年大阪市生まれ。大正三年京都帝国大学工科大学工業化学科を卒業し、翌四年から本校の嘱託教員となり、臨時写真科と製版科の物理学、化学、化学実験や工芸化学、数学等の授業を担当した。写真学に造詣が深く、光化学や写真術第三部授業も担当し、鎌田弥寿治留学中は臨時写真科主任兼理事もつとめた。『東京美術学校校友会月報』に寄稿した「真鍮の点金着色法の研究」（第二十八巻第八号）、「鉄器の燻蒸着色に就て」（第二十九巻第六号）、「古画の洗浄に就て」（第三十巻第四号）に研究の一端を窺うことが出来る。特に「古画の洗浄に就て」は大英博物館におけるスコット（Dr. Alexander Scott）を中心とする科学研究室の仕事を参観して発